

[特集] 青葉山の生物相

## 青葉山市有林（仙台市）の鳥類相

移川 仁\*・溝田浩二\*\*

Avi-fauna of the Aobayama Area, Sendai City, Northeastern Japan

Jin UTSUSHIKAWA and Koji MIZOTA

**要旨**：青葉山市有林（仙台市）には、100万都市の市街地に隣接しているとは思えぬほど多様性に富んだ動植物が生息している。この森を環境教育の観点から捉え、フィールドミュージアムとして積極的に活用していくためには動植物の継続的な生態調査が欠かせない。1994年～2005年の11年余、青葉山市有林の鳥類相に関する継続的な調査を行なった結果、16目43科142種（留鳥50種、夏鳥41種、冬鳥42種、漂鳥7種、旅鳥（迷鳥）2種）が確認された。

**キーワード**：青葉山市有林、野鳥、フィールドミュージアム、生物多様性、環境教育

## 1. はじめに

青葉山は仙台市街地の西方に広がる緑濃い丘陵地であり、古くから“杜の都”の象徴として親しまれてきた。人口100万人の大都市の市街地に隣接しているとは思えぬほど多様性に富んだ動植物が息づいているこの丘陵地を、宮城教育大学環境教育実践研究センターではフィールドミュージアム（Field Museum）に選定し、これまで積極的に環境教育の場で活用してきた。フィールドミュージアム構想では、青葉山の動物や植物といった自然全体を生きた「標本」に、青葉山はそれらがあるがままの姿で展示してくれる「博物館」に見立てている。そして、それらの優れた素材を“環境教育”という観点から捉え、整理し、有機的につなげていくことで、子どもたちの無限の興味や関心を引き出し、育んでいくことを目標としている。

フィールドミュージアム構想は、大きく二つの柱から成り立っている。一つは青葉山の動植物の生息状況や分布の実態といった基礎調査を行うことであり、それらの生物相調査の成果を総合することによって、青葉山の自然の全体像を把握することである。もう一つは、それらの調査成果を教育という視点からアレンジし、有機的に関連づけ、それに基づいた環境教育プログラムを作成し、地元の小・中・高校の授業教材とし

て積極的に提供していくことである。この、フィールドミュージアム構想を通して、環境教育を、環境問題に関するたくさんの情報を一方的に詰め込む教室の授業という狭い枠から脱皮させ、小・中・高校の児童・生徒たちに教室と野外とをイキイキと連結させる実践の場とすることができる（伊沢，1998）。また、そうすることで、市民の財産としての青葉山をもっとも良い形で将来にわたって保全していくことも可能となるだろう。

本報告では、1994年7月～2005年12月までの11年余の間に実施した青葉山の鳥類相に関する調査結果を報告する。

## 2. 調査地および調査方法

## 1) 調査地

調査を行なったのは、仙台市街地の西方に広がる青葉山市有林である（図1）。市有林は、北緯38度14分～15分、東経140度51分52分に位置し、標高差は、市有林北端の三居沢入口（標高50m）から、市有林南端の青葉台（標高190m）にかけて約140mある。総面積は130haであり、その中を起伏に富んだ遊歩道が網の目状に整備されている。

この地域の植生は暖温帯を代表する常緑広葉樹林

\*青葉山の緑を守る会，\*\*宮城教育大学環境教育実践研究センター

と、冷温帯を代表する落葉広葉樹林との移行帯にあたり、中間温帯林が成立している。この植生を代表する自然林はモミ・ブナ林で、これが青葉山市有林の極相林である。ここではモミを主体として、イヌブナ、イヌシデ、アカシデ、アサダ、クリ、イタヤカエデなどの落葉高木が混生し、下生植物にはヤブムラサキ、アオキ、ヤブコウジ、オオバジャノヒゲ、ヒメカンスゲなどが多く生育している。現在は人手が加わって、コナラ、クリ、アカマツ等を交えた二次林に変わっている林分も少なくない。

## 2) 調査方法

青葉山の緑を守る会では、1994年7月～2006年1月までの11余年の間に、毎月1度のペースで青葉山自然観察会を実施してきた。植物相の調査は、主として観察会当日あるいは事前のコース下見の際に実施した。なお、青葉山市有林における季節は、春を4月～5月、夏を6月～8月、秋を9月～11月、冬を12月～3月とした。

## 3) レッドリストについて

本文中にはレッドリストに関する記述が登場するので、各カテゴリーの基準について簡単に解説を加えて

おく。

[環境省と宮城県に共通するカテゴリー]

- 絶滅：すでに絶滅したと考えられる種
- 野生絶滅：飼育・栽培下でのみ存続している種
- 絶滅危惧 I 類：絶滅の危機に瀕している種
- 絶滅危惧 II 類：絶滅の危険が増大している種
- 準絶滅危惧：存在基盤が脆弱な種
- 情報不足：評価するだけの情報が不足している種
- 絶滅のおそれのある地域個体群：地域的に孤立している個体群で、絶滅のおそれが高いもの。

[宮城県独自のカテゴリー]

- 要注目種：宮城県では、現時点では普通に見られるものの、特徴ある生息・生育状況等により注目すべき種。具体的には、隔離分布種、分布北限・南限種、基準産地種、その他の4種が含まれる。

## 3. 結果と考察

### 1) 確認された鳥類

調査の結果、16目43科142種(留鳥50種、夏鳥41種、冬鳥42種、漂鳥7種、旅鳥(迷鳥)2種)が確認された(表1)。そのうち、観察会(1994年8月～2005

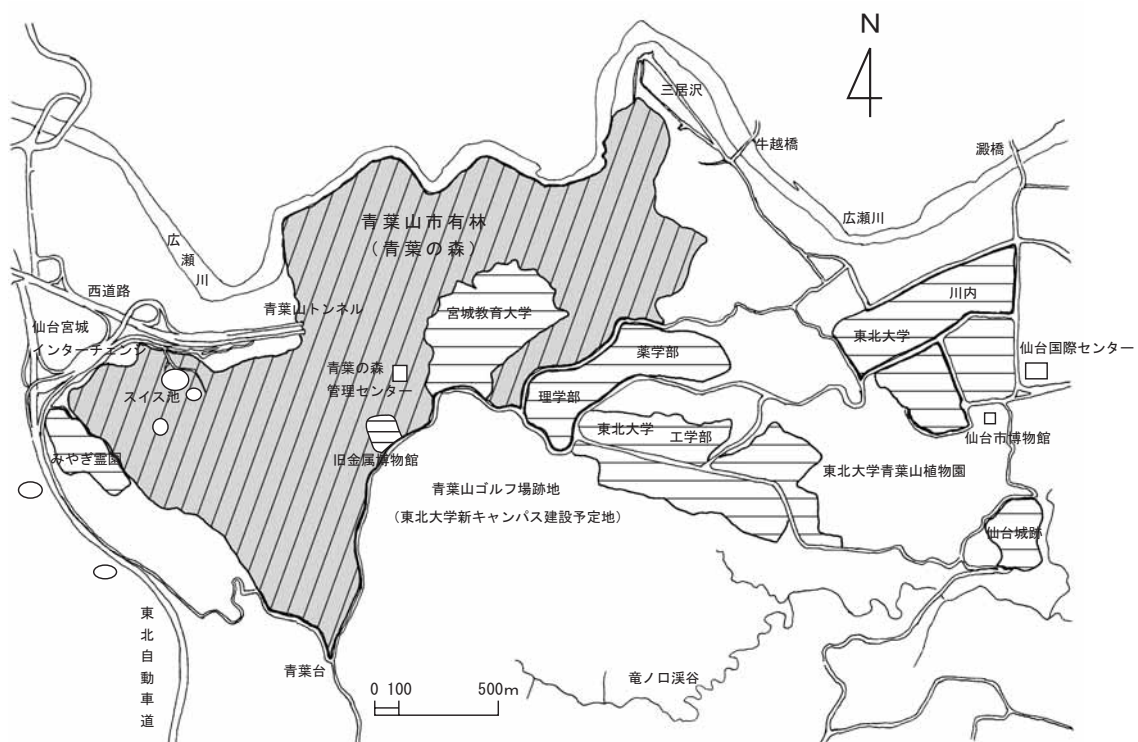


図1. 青葉山市有林の概略図

表1. 青葉山市有林鳥類リスト

種名	季節	種名	季節	種名	季節	種名	季節
	春夏秋冬		春夏秋冬		春夏秋冬		春夏秋冬
★カイツブリ	〇〇〇〇	★コジュケイ	〇〇〇〇	◆ショウドウツバメ	〇 〇	◆オオルリ	〇〇〇
◇ミミカイツブリ	〇	★ヤマドリ	〇〇〇〇	◆ツバメ	〇〇〇	◆コサメビタキ	〇〇〇
☆カワウ	〇〇	★キジ	〇〇〇〇	◆コシアカツバメ	〇	◆サンコウチョウ	〇
★アオサギ	〇〇〇〇	◆クイナ	〇	◆イワツバメ	〇〇〇	★エナガ	〇〇〇〇
★ダイサギ	〇〇〇〇	◆ノン	〇	★キセキレイ	〇〇〇〇	★コガラ	〇〇〇〇
◆チュウサギ	〇	◇オオバン	〇 〇	★ハクセキレイ	〇〇〇〇	★ヒガラ	〇〇〇〇
★コサギ	〇〇〇〇	◆コチドリ	〇	★セグロセキレイ	〇〇〇〇	★ヤマガラ	〇〇〇〇
◆ササゴイ	〇〇	★イカルチドリ	〇〇〇〇	◇ピンズイ	〇 〇〇	★シジュウカラ	〇〇〇〇
★ゴイサギ	〇〇〇〇	△キアシシギ	〇 〇	◇タヒバリ	〇	★ゴジュウカラ	〇〇〇〇
◆ミゾゴイ	〇〇	★イソシギ	〇〇〇〇	◆サンショウクイ	〇〇	★メジロ	〇〇〇〇
◆ヨシゴイ	〇	★ヤマシギ	〇 〇〇	★ヒヨドリ	〇〇〇〇	★ホオジロ	〇〇〇〇
◇マガン	〇 〇	◇タシギ	〇〇	★モズ	〇〇〇〇	◇カシラダカ	〇 〇〇
◇オオハクチョウ	〇 〇〇	◇アオシギ	〇 〇〇	◇キレンジャク	〇 〇〇	◇ミヤマホオジロ	〇 〇
◇コハクチョウ	〇	◆ウミネコ	〇〇	◇ヒレンジャク	〇 〇〇	◆ノジコ	〇
★オンドリ	〇〇〇	◆カモメ	〇	★カワガラス	〇〇〇〇	◇クロジ	〇〇 〇
◇マガモ	〇 〇〇	◇セグロカモメ	〇 〇	★ミノサザイ	〇〇〇〇	★アオジ	〇〇〇〇
★カルガモ	〇〇〇〇	◇ユリカモメ	〇 〇〇	◇カヤクグリ	〇 〇〇	◇オオジュリン	〇 〇〇
◇コガモ	〇〇〇〇	◆コアシサシ	〇	◆コマドリ	〇 〇	★アトリ	〇 〇〇
◇オカヨシガモ	〇	★キジバト	〇〇〇〇	◆コルリ	〇〇〇	★カワラヒフ	〇〇〇〇
◇ヒドリガモ	〇	☆アオバト	〇〇	◇ルリビタキ	〇 〇〇	◇マヒワ	〇 〇
◇オナガガモ	〇 〇	◆カッコウ	〇〇〇	◇ジョウビタキ	〇 〇	◇ハギシコ	〇 〇
◇シマアジ	〇	◆ツツドリ	〇	◆ノビタキ	〇 〇	◇オオマシコ	〇 〇
◇ハシビロガモ	〇	◆ホトトギス	〇〇	☆イソヒヨドリ	〇 〇〇	◇ベニマシコ	〇 〇〇
◇ホシハジロ	〇	☆オオコノハズク	〇	◇トラツグミ	〇 〇	◇ウソ	〇 〇〇
◇キンクロハジロ	〇	◆アオバズク	〇	◆クロツグミ	〇〇	◇イカル	〇 〇〇
◇ミコアイサ	〇	★フクロウ	〇〇〇〇	◇アカハラ	〇 〇〇	◇シメ	〇 〇〇
◇カワアイサ	〇 〇〇	◆ヨタカ	〇	◇シロハラ	〇 〇〇	★スズメ	〇〇〇〇
☆ミサゴ	〇	◆アマツバメ	〇〇〇	◇ツグミ	〇 〇〇	◆コムドリ	〇〇〇
★トビ	〇〇〇〇	★ヤマセミ	〇〇〇〇	◆ヤブサメ	〇〇	★ムクドリ	〇〇〇〇
★オオタカ	〇〇〇〇	◆アカショウビン	〇	★ウグイス	〇〇〇〇	△コウライウグイス	〇
◆ツミ	〇〇	★カワセミ	〇〇〇〇	◆オオヨシキリ	〇	☆カケス	〇 〇〇
★ハイタカ	〇〇〇〇	◆ブッポウソウ	〇	◆メボソムシクイ	〇	★オナガ	〇〇〇〇
★ノスリ	〇〇〇〇	★アオゲラ	〇〇〇〇	◆エゾムシクイ	〇	★ハシボソガラス	〇〇〇〇
◆サシバ	〇	★アカゲラ	〇〇〇〇	◆センダイムシクイ	〇〇	★ハシブトガラス	〇〇〇〇
★ハヤブサ	〇〇〇〇	★コゲラ	〇〇〇〇	☆キクイタダキ	〇 〇〇		
★チョウゲンボウ	〇 〇〇	◆ヒバリ	〇	◆キビタキ	〇〇〇		

★留鳥 50種 ◆夏鳥 41種 ◇冬鳥 42種 ☆漂鳥 7種 △旅鳥(迷鳥) 2種

年1月の計123回)で確認された鳥類は、11目32科73種であった。

青葉山市有林は、地質学的には中期・更新世火山灰を母材とする黒ぼく土や褐色森林土、黄褐色森林土、古赤色土等が分布し、地形的には入り組んだ、急峻な谷や崖地及び広瀬川に接する水辺が広く分布している。この土壤の多様さと地形の複雑さが、本地域を面積(130ha)に比して極めて多様な植物相にしている(確認植物種数:987種, 溝田・移川, 2005; 移川・溝田, 2005)。その植物相の豊かさが昆虫類、そして鳥類の豊かさをもたらしていると推測される。

主体となる樹林はコナラを主とした落葉広葉樹林であるが、モミ天然林、アカマツ林、スギ・ヒノキ林、シロヤナギ・オニグルミ林等がモザイク状に配置され、それぞれの樹林の林縁には藪もよく発達している。そのため、樹林地には周年、シジュウカラ、ヤマガラ、エナガ、ヒヨドリ等が優先し、アオゲラ、アカゲラ、コゲラのキツツキ類も多く、繁殖期にはキビタキ、サンコウチョウ等、越冬期にはビンズイやアカハラ、シロハラ、トラツグミ等のツグミ類が目立っている。藪地にはウグイス、アオジ、キジ等が多く生息し、夏季にはヤブサメ等、冬季にはルリビタキ等が目立っている。また、青葉山市有林の北側は2kmにわたって広瀬川に接し、川に流入する沢も多く、コサギ等のサギ類、オシドリ等のカモ類、イソシギ、イカルチドリ等のシギ・チドリ類、キセキレイ、セグロセキレイ等のセキレイ類も広く分布し、ヤマセミ、カワセミ、カワガラスも生息している。川に面した開けた草地等にはホオジロ、カワラヒワ等が多く、冬季はカシラダカ等が目立っている。川に沿った崖の周辺にはヤマドリ等が生息し、夏季にはオオルリ等が繁殖する。青葉山市有林の最大の特徴は、多種の猛禽類が数多く生息していることで、散在するモミやアカマツの高木には、オオタカやハイタカ、ツミ、トビ等が営巣している。フクロウも生息・繁殖している。

## 2) 確認された主な鳥類

青葉山市有林において確認された鳥類の中で、主だったものは以下の通りである。

### ◆ミゾゴイ *Gorsachius goisagi*

夏鳥。山地・丘陵のよく茂った森に生息する。主に

サワガニ、カエル、魚類等を捕食する。青葉山では繁殖期の夜間、ポーッポーッという声が聞かれ、姿も度々観察されている。1999年9月には、青葉滝付近のコナラ林で成鳥2羽を確認したが、1羽は怪我をしていたため、捕獲・治療後同所に放鳥した。識別は難しかったが、もう1羽は当年生まれの若鳥と思われ、本林内での営巣・繁殖の可能性を推測させた。環境庁レッドデータブックで準絶滅危惧(NT)に指定されている。

### ◆オオタカ *Accipiter gentilis*

留鳥。生態系食物連鎖の頂点に立つ、この森を代表する猛禽類である。青葉山とその周辺で毎年のように繁殖している。春、アカマツやモミにかけられた、数km圏内3~5個の古巣から一つを選び営巣することが多く、産卵後孵化した雛は初夏から夏に巣立つ。行動圏は100~200haといわれ、時に獲物を追って市街地にまで進出している。本林内では、食い残し(ドバト、キジバト、ヒヨドリ、ハシボソガラス、ツグミ類、ノウサギ等)や古巣のほか、上空や林間を鋭角的に飛翔する姿も頻繁に観察され、繁殖期にはキーッキーッと言う鋭い声をよく耳にすることができる。かつては全国のどこの山地・丘陵地~平地の森林にも生息していたが、近年は乱開発などにより激減し、環境庁レッドデータブックで絶滅危惧Ⅱ類(VU)に指定されている。2005年にも、青葉山市有林西部で営巣・繁殖し、雛が3羽とも巣立ったことは(一般的には1羽)特筆に価する。

### ◆ツミ *Accipiter gularis*

夏鳥。本種も、生態系食物連鎖の頂点に立つ猛禽類である。山地~平地の林に生息し、ヒヨドリ程の大きさで、主に小鳥類や昆虫類を捕食する。青葉山では、林間を飛翔する姿が観察され、1995年には、三居沢地区のアカマツでの営巣が確認されている。ピョッピョピョ・・・と言う警戒の声はオオタカ等に比べてか細く聞こえる。宮城県レッドデータブックで情報不足(DD)に指定されている。

### ◆ハイタカ *Accipiter nisus*

留鳥。本種も、生態系食物連鎖の頂点に立つ猛禽類である。亜高山~平地の森林に生息し、ハト程の大きさで、主に小鳥やネズミ等を捕食する。青葉山では、林間を巧みに飛翔する姿や、旧みみずくし広場のアカ

マツ樹上の巣に出入りする姿も観察されており、青葉山市有林内での営巣・繁殖の可能性が大きい。環境庁レッドデータブックで準絶滅危惧 (NT) に指定されている。

◆ノスリ *Buteo buteo*

留鳥。本種も、生態系食物連鎖の頂点に立つ猛禽類である。一般的には、タカの仲間ではトビの次によく見られ、青葉山市有林でも一年中観察される。大きさはオオタカ程で、ネズミやモグラ等の小型哺乳類、小鳥類やヘビ、カエル等を捕え、主に地上で採食する。青葉山では、アカネズミ、アオダイショウ、モルモット等を捕食する姿が確認されている。

◆サンバ *Butastur indicus*

夏鳥。本種も、生態系食物連鎖の頂点に立つ猛禽類である。大きさはオオタカ程で、爬虫類や両生類を好み、昆虫やネズミも捕える。青葉山では、繁殖期にピクチャーという声が聞かれ、1998年には西部のアカマツ樹上で営巣が確認されている。宮城県レッドデータブックで絶滅危惧Ⅱ類 (VU) に指定されている。

◆ハヤブサ *Falco peregrinus*

留鳥。本種も、生態系食物連鎖の頂点に立つ、オオタカと共にこの森を代表する猛禽類である。一般には、山地～平地の大きな河川や海岸などに生息するが、仙台では2003年から毎年、経ヶ峰の断崖で営巣・繁殖している。餌はほとんどが鳥類で、キクイタダキからキジ・カモ類まで多様である。青葉山でも、毎日の様にドバトやヒヨドリを捕え、枯松等の樹上で採食する姿が観察されている。環境庁レッドデータブックで絶滅危惧Ⅱ類 (VU) に指定されている。

◆チョウゲンボウ *Falco tinnunculus*

留鳥。本種も、生態系食物連鎖の頂点に立つ猛禽類である。高山～平地の草地、農耕地、河原等に生息し、ハト程の大きさで、主に小鳥やネズミ、昆虫等を捕食する。仙台では長年にわたり、経ヶ峰や竜ノ口の断崖で営巣・繁殖している。青葉山でも、広瀬川上空を停空飛行して、川原で採食する小鳥群を襲う姿がよく観察されている。

◆ヤマドリ *Phasianus soemmerringii*

留鳥。本州～九州にのみ生息する日本固有種。青葉山では、街のざわめきが聞こえる沢筋の藪で繁殖して

いる。繁殖期には、ドドドッと言うオスの羽ばたく音(幌打ち)がよく聞かれる。オスは赤銅色で眼の周りは紅色、キジより大きく全長は約130 cmもある。通常奥山に生息する本種が青葉山で繁殖していることはきわめて貴重である。

◆アオシギ *Gallinago solitaria*

冬鳥。山間の河川・溪流等で越冬し、昆虫類の幼虫や陸生貝類等を採食する。青葉山では、管理センターが建設される以前は、本区域が長年にわたる越冬地(湿地)だったが、建設後は、姿は時折観察されるものの、特定の越冬地は確認されていない。通常奥山に生息する本種が青葉山市有林で越冬している事自体が貴重である。

◆カッコウ *Cuculus canorus*

夏鳥。山地～平地の林や草原で、主にガの幼虫などを採食する。「仙台市の鳥」に指定されているように、かつては青葉山はもちろん、仙台中でその声が聞かれていたが近年激減している。原因は、越冬地である東南アジアの森林破壊とともに、繁殖地である広瀬川河畔等の自然破壊が、托卵するオオヨシキリ等を追い遣ったためと推測される。現在は、初夏および秋に姿と声が確認されるのみである。

◆ホトトギス *Cuculus poliocephalus*

夏鳥。山地～平地の林や草地で、主にガの幼虫などを採食する。カッコウとは異なり、青葉山に多く生息しているが、それは、本林では藪がよく発達し、托卵するウグイスが多く生息・繁殖しているためであると思われる。

◆オオコノハズク *Otus lempiji*

漂鳥。山地～平地の森林で、主にネズミ類を捕食する。青葉山では1995年5月に通称「せせらぎ広場」で目視確認されたほか、度々観察されており、本林内での営巣・繁殖の可能性も推測される。宮城県レッドデータブックで情報不足 (DD) に指定されている。

◆アオバズク *Ninox scutulata*

夏鳥。山地～平地の林で、主に夜行性の昆虫類などを捕食する。青葉山では繁殖期の夜間に、ホッホウホッホウという声がよく聞かれており、本林内での営巣・繁殖の可能性も推測される。宮城県レッドデータブックで準絶滅危惧 (NT) に指定されている。

◆フクロウ *Strix uralensis*

留鳥。本種も、生態系食物連鎖の頂点に立つ、オオタカと共にこの森を代表する猛禽類である。山地～平地の林や草原で、主にネズミ類や鳥類を捕食する。青葉山では、林内中心部の樹洞で営巣・繁殖している。夜行性だが時に早朝、羽音もなく飛翔し獲物を捕える姿が観察される。遊歩道にはよく、ネズミやヘビ、コウモリ等の残骸を含んだペリット（吐物）が観察され、夜間には、ゴロツケゴッホウという声がよく聞かれる。乱開発等により全国的に激減している。宮城県レッドデータブックで要注目種に指定されている。

◆ヨタカ *Caprimulgus indicus*

夏鳥。山地～平地の林で、主に夜行性の昆虫類などを捕食する。青葉山では繁殖期の夜間に、キョキョキョキョという声が聞かれており、本林内での営巣・繁殖の可能性も推測される。

◆ヤマセミ *Ceryle lugubris*

留鳥。主として山地の溪流に棲み、水中に飛び込んで嘴で魚類を捕える。広瀬川を代表する鳥で、以前は経ヶ峰の崖で営巣・繁殖していたが、最近では上流に後退してしまった。原因は不明。2000年に本林内青葉滝付近で営巣・繁殖に成功したものの、以後再び営巣することはなく、観察機会も減少傾向にある。通常奥山の溪谷に生息する本種が青葉山（広瀬川）に生息している事自体、貴重である。

◆アカショウビン *Halcyon coromanda*

夏鳥。主として山間の溪流に棲み、水中に飛び込んで嘴で魚類を捕える。青葉山では1995年5月に通称「せせらぎ広場」付近で確認されたが、その後の記録はない。宮城県レッドデータブックで情報不足（DD）に指定されている。

◆ブッポウソウ *Eurystomus orientalis*

夏鳥。山地～平地の林で、大型昆虫類などを空中捕食する。青葉山では2003年9月に三居沢付近の林内で確認されたが、その後の記録はない。

◆アオゲラ *Picus awokera*

留鳥。本州～屋久島にのみ生息する日本固有種。山地～平地の林で、昆虫やクモ、木の実も採食する。特に、昆虫類に被害され始めた木々を助け、森を蘇らせるため、アカゲラ等と共に「森の医師」と呼ばれる。大木

の多い広葉樹林を好み（アカゲラは混交林を好む傾向がある）、自然の豊かさの指標ともなっている。青葉山市有林に数多く生息・繁殖している。

◆ビンズイ *Anthus hodgsoni*

冬鳥。高原・山地～平地の林で、昆虫類やクモ類、冬には草木の種子も採食する。青葉山には10月中旬頃に数多く渡来して小群を作り越冬する。アカマツ林の林床で採食し、人が近付くとゾイーッという声を発して飛び立つ姿がよく観察されている。

◆ヒヨドリ *Hypsipetes amaurotis*

留鳥、または漂鳥（冬鳥、旅鳥もいる）。山地～平地の林や市街地で、昆虫類、両生類、爬虫類から木の実、花蜜、花弁、花芽、野菜の葉まで様々なものを採食する。青葉山では、一年中いる留鳥のほか、北方や奥山から来訪し越冬するもの（冬鳥・漂鳥）、春秋の通過途中に立ち寄るもの（冬鳥・漂鳥・旅鳥）の3種類いるが、識別は困難である。秋に大群を作り、波状飛行して移動する様は壮観である。雑食性のため、環境破壊にもよく順応している。

◆カワガラス *Cinclus pallasii*

留鳥。主として山間の溪流で、水中に潜ったり、水底を歩いたりして水棲昆虫類や魚類を捕食する。青葉山では、広瀬川沿岸部で周年観察されているが、三居沢周辺の巣穴が河川管理工事で破壊されてからは、営巣地が上流に後退して観察頻度が下がっている。繁殖期が早く、オスは1月中旬頃から囀り始める。通常奥山の溪谷に生息する本種が青葉山（広瀬川）に生息している事自体、貴重である。

◆ルリビタキ *Tarsiger cyanurus*

漂鳥。春～夏の繁殖期は亜高山の林で過し、青葉山には秋に来訪して1羽ずつ縄張りを持ち、昆虫類、木の実等を採食する。人をあまり恐れないため、目の覚めるような瑠璃色の姿（♂成鳥）に出会うことも多い。ヒッヒッと言うジョウビタキに似た声で鳴くが、冬の暖かな朝等にはヒッチョロチュルリ等と囀ることもある。

◆シロハラ *Turdus pallidus*

冬鳥。山地～平地の林で、土中のミミズ類、昆虫類の幼虫などを採食し、秋～冬には木の実も食べる。青葉山には10月中旬頃に渡来して越冬し、5月中旬頃まで残るものもある。採食中に人が近付くとツイーッ

という声を発して飛び立つ姿がよく観察されている。越冬中は1羽で過ごす、渡りの時季には大群を作ることがある。

◆ヤブサメ *Cettia squameiceps*

夏鳥。山地～平地の下草の多い林で、昆虫類、クモ類などを採食する。青葉山には4月中旬頃渡来し、森影でシシシ・・・と尻上がりに高くなる虫の音のような声で鳴く。名の由来通り（鳴声やヤブに降る雨音に似ている）主に藪の中で暮らし、10月頃東南アジア方面に帰っていく。ウグイスに似るがとても小さく（体長10.5cm）、飛ぶだけでなく丈夫な脚で藪中を走り回り獲物を捕える。

◆ウグイス *Cettia diphone*

留鳥。高原、山地～平地の林、川原、市街地等の藪の多い所で、昆虫類、クモ類などを採食する。青葉山では、3月初旬から8月頃まではっきりとした縄張りを持ち、オスがよく囀っている。繁殖期以外は1羽で、ジャジャッと言いながら藪中で過ごす、姿が地味で目立たない。美声で、古来より本邦一の人気者であるが、市街地や河川では、生息地である藪地の消失によって激減している。

◆センダイムシクイ *Phylloscopus coronatus*

夏鳥。山地～平地の林で、昆虫類、クモ類などを採食する。青葉山には、4月下旬に来訪し、6月頃までチチョッチョーとよく囀っている。8月にも囀りや姿が確認されていることから、本林内での繁殖の可能性が推測される。名の由来は、鳴き声が、仙台が舞台の「伽羅先代萩」の鶴千代君（ツルチヨギミー）に聞こえる事による。

◆キビタキ *Ficedula narcissina*

夏鳥。山地～平地の高木の多い林で、昆虫類、クモ類などを採食する。青葉山には4月下旬から5月上旬に渡来し、樹洞などを利用して多く営巣・繁殖している。オスは黄橙色の美しい姿で、高木から張り出した横枝に止まってピッチュリピルリ・・・等と澄んだ声で囀る。普通は奥山に生息する本種が、100万都市の中心に近い森で数多く営巣・繁殖している事は特筆される。

◆オオルリ *Cyanoptila cyanomelana*

夏鳥。主に溪流のある山地の林等で、昆虫類、クモ

類などを採食する。青葉山には4月下旬から5月上旬に渡来し、崖の窪みなどを利用して営巣・繁殖している。毎年7月下旬頃まで、沢筋の高いこずえに止まり、美しい瑠璃色の姿でヒーリーリー等と囀る。その美声から、ウグイス、コマドリと共に日本三名鳥とされる。本林では、地すべり対策の排土工事により一時的に営巣地を奪われ、1999～2000年には東屋を利用した営巣・繁殖も確認されたが、その後は通常の営巣・繁殖活動を取り戻している。普通は奥山に生息する本種が、100万都市の中心に近い森で営巣・繁殖している事は特筆に値する。

◆サンコウチョウ *Terpsiphone atrocaudata*

夏鳥。山地～平地のスギ・ヒノキ等のある暗い林で、昆虫類などを採食する。毎年青葉山には6月上旬頃に渡来し、ヒノキ林等で営巣・繁殖している。1998年には宮城教育大学キャンパス北側のヒノキ林での営巣・繁殖を確認、3羽の雛が巣立った。巣は細枝の股を利用し、苔、木の皮を主材にして外側にウメノキゴケを貼り付けていた。紫色の長い尾をヒラヒラさせて飛ぶ姿は極楽鳥を髣髴させる。本林では、名の由来となった、ツキ、ヒー、ホシ（月、日、星で三光）の声をよく聞くことができる。近年、棲息環境悪化等により激減しているが、100万都市の中心に近い当林での営巣・繁殖は特筆される。

◆シジュウカラ *Parus major*

留鳥。山地～平地の林や樹木の多い市街地まで広く分布し、昆虫類、クモ類、草木の種子や実等を採食する。青葉山にも多く生息し、冬には群れを作り、ヤマガラ、エナガ、コゲラ、メジロ、ヒガラ、コガラ、キクイタダキ、ゴジュウカラ等と混群を作って行動する。

◆マヒワ *Carduelis spinus*

冬鳥。山地～平地の林、草原等で、草の種子やヒノキやハンノキ等の木の種子を好んで採食する。青葉山には11月初旬に渡来して5月頃まで群れで飛翔、時に大群となって波状飛行で移動する。名の由来は、その姿が「微小（ひわやか）」なことによる。

◆ウソ *Pyrrhula pyrrhula*

冬鳥または漂鳥。山地～平地の林で、草の種子や芽、昆虫などを採食する。繁殖期は亜高山の針葉樹のある林で過ごす、青葉山には秋～春に渡来する。サクラ類

の花芽を好んで食べるため害鳥として嫌われることもあるが、昔から口笛のような声の面白さや姿の面白さが好まれてきた。名の由来は、口笛を昔はウソと言っていた事による。

#### ◆カケス *Garrulus glandarius*

漂鳥。山地～平地の林で、主にドングリ等の木の実を好むが、雑食性が強い。かつて青葉山では繁殖記録もあったが、今ではジャージャーという声が秋の到来を感じさせている。物真似が上手く、他の鳥や、犬・猫の声も真似る。晩秋にはドングリを運んでは、木の根元や隙間に隠す光景が観察される。

#### 3) 希少種について

当林で確認された種の中で、環境庁レッドデータブックと宮城県レッドデータブックに記載されている種は以下の通りである。

##### 環境庁レッドデータブック

[絶滅危惧Ⅱ類 (VU)] : オオタカ、コアジサシ、サンショウクイ、ハヤブサ

[準絶滅危惧 (NT)] : チュウサギ、ノジコ、ハイタカ、マガン、ミサゴ、ミゾゴイ

##### 宮城県レッドデータブック

[絶滅危惧Ⅱ類 (VU)] : コアジサシ、サシバ、サンショウクイ

[準絶滅危惧 (NT)] : アオバズク、オオタカ、チュウサギ、ハイタカ、ハヤブサ、マガン、ミサゴ、ミゾゴイ

[情報不足 (DD)] : アカショウビン、オオコノハズク、ツミ

[絶滅の恐れのある地域個体群 (LP)] : ノビタキ

[要注目種] : オオバン、クイナ、コシアカツバメ、ノジコ、フクロウ

この中でオオタカ、ハイタカ、ハヤブサ、フクロウは、営巣・繁殖が確認されている留鳥であり、青葉山市有林を代表する希少種でもある。また、サシバ、ツミも営巣・繁殖が確認され、ミゾゴイ、オオコノハズク、アオバズクもその可能性が推測されている。このことからわかるように、青葉山市有林には希少種であり、生態系食物連鎖の頂点に立つ猛禽類が数多く生息し、この地域がいかに豊かな森であるかを証明しているといえる。

#### 4. おわりに

青葉山市有林は、100万都市仙台的ほぼ中心部に位置しながら（市役所から2km）、多種多様な鳥類が生息し、同時に小型哺乳類も多数生息することから、それらを餌とする猛禽類もまた多種にわたり生息している。この事が、この森の最大の特徴であり、自然度の高さの証明ともなっている。その中でも代表種といえるものがオオタカであるが、その生息の必須条件として、開けた草地等のある、まとまった森林が存在することが挙げられる。青葉山市有林内には、開けた草地はほとんどないが、「東北大学移転」や「地下鉄東西線」、「都市計画道路」の建設予定地である旧青葉山ゴルフ場地域には、広大な草原が存在し、現在、オオタカは一年を通してここを狩場・採食場として使用している。場内には、最近の調査（2005年12月）でも、古巣が数巣確認されており、過去の営巣の可能性と共に、今後使用される可能性も大であると考えられる。場内周辺は、休息地・罅にもなっており、「地下鉄東西線」と「都市計画道路」の工事予定地である竜ノ口溪谷地域も、本種が採食場・休息地等として周年使用している極めて重要な地域となっている。

今後、各建設工事が進み、旧青葉山ゴルフ場地域や竜ノ口溪谷地域の自然破壊が進行すると、青葉山市有林を含む青葉山全域の自然破壊が進むことが十分に予想される。オオタカに象徴される、青葉山の豊かな自然が、後世にいつまでも引き継がれることを心から願うものである。

#### 謝 辞

これまで青葉山市有林の生物相調査を継続することができたのは、青葉山の緑を守る会（植村千枝会長）のメンバーや宮城教育大学環境教育実践研究センターの学生・スタッフの協力があったからこそである。また、青葉の森管理センターをはじめとする関係機関の皆様には諸種の便宜をはかっていただいた。この場をお借りして心からお礼申し上げたい。

#### 引用文献

伊沢紘生, 1998. EECプロジェクト研「仙台市内広瀬川及び名取川流域でのSNC構想の実践」, 宮城教育大学環境研究紀要, 1:63-70.